

『私を創ってくれた3つの作品』

スペースデザイン部会員 川島 源次郎

<作品1>



「bind」 2004年 第68回新制作展新作家賞 W260×D100×H230(cm)

「木と麻ロープ」

私が大学院生の時、加賀谷先生に、北陸地方や飛騨高山地域へ連れて行ってもらったことがあります。その時に訪れた白川郷・合掌造りの家の屋根裏で、木の梁（はり）同士を縄で接合した建築様式を目にしました。江戸時代に建てられたという民家の梁は、長い時間をかけて囲炉裏の煤（すす）で燻されて黒光りし、それが白い縄とのコントラストでとても美しいと感じました。また、白川郷には古くから「結（ゆい）」という相互扶助の心が大切にされており、豪雪による厳しい自然環境の中で、家同士が助け合うという考え方が根付いていることにも感動しました。この時の印象を基に、木と縄を組み合わせた作品をつくりはじめました。また、「結」の解釈を「結ぶ・連結する・縛る」へと展開し、ジョイントに麻のロープを使って、何度か新制作展にも出品しています。この作品は3連リングを床から空間へ展開し自立させたもので、リングとリングを麻のロープで繋いで固定しました。リングには構造上の強度が必要だったので比較的、強度と粘りがあるタモの集成材を使用しました。床には支持体の役割として、リング状にくり抜いた鉄板を敷き、作品を自立させています。

<作品 2>



「水の庭」 2012年 第76回新制作展 W200×D35×H35(cm)

「点と線と面」

大学を出て10年くらいは立花克樹氏と共同で元農業用倉庫だった建物を借りて制作していました。大学のような大型機械や設備はありませんでしたが、広くて静かで、とてもいい環境でした。そこは、家具づくりの盛んな福岡県大川市まで車で15分くらいの立地でしたので、いろいろな種類の木材が手に入りやすく、よく馴染みの材木屋さんに頼み込んで、ウォールナットやオーク、メイプル、ビーチなどの無垢材を小売りしてもらいました。その頃に、たまたまパウル・クレーについ

て書かれた本を読んで「ユークリッド幾何学」や「非ユークリッド幾何学」というものを知りました。一度、自分なりにクレーを真似て、基礎的な概念「点と線と面」について考えてみようと思ったのがきっかけです。はじめは、球を鉄芯に串刺して、数珠のように連続させたり、球体から板状へとフォルムを変えながら連続させたりといった作品をつくりました。徐々に、水滴や植物などのイメージを足し算して、テーブルやレリーフをつくりました。この作品は球体と円柱を一つのフォルムにしようと試みた作品です。有機的な曲線によって空間の歪みをつくろうとしました。ウォールナットの無垢材から鋸（のこぎり）で形を切り出し、鑿（のみ）で彫り、鉋（かんな）で曲線を整えていきました。木材加工の中では、鑿や鉋を使う「手仕事」が中心で、時間と体力を要しますが、無垢材を削るが、とても気持ちがよかったのを覚えています。

<作品3>



「CUT-SAW」2018年 第82回新制作展 W150×D50×H50(cm)

「分解と再構築」

大学で出会った木工を出発点として、20年以上が経ちました。アートやデザインの世界、また美術教育の世界に、ヨチヨチとですが関わらせてもらっています。その間、個人的には住む場所や生活環境もいづらか変わりました。大きなところでは、社会の産業構造や、自然環境もずいぶん変わってきました。おそらく私以外にも多くの方が、自分や社会のことを否応なしに考えなければならない時代になったのではないかと思います。そんなある日、父親から「お前が生まれた時、3町分（1町=100m×100m）の杉と檜の苗木を植えた。その時の杉と檜がこうなったんだ」と杉林を見せられました。聞くところによると、私のひい爺さんが、焼き物の窯用に薪仕事をしていた山があって、子どもが生まれたらそこに苗木を植え、一人前になる頃に、建築材料として使用する、といった慣習があったそうです。その話から、昔の人の「自然と共存する生活」と、それを継承していこうとする地元の「地域性」により関心を持つようになりました。（地元長崎で取り組んでいる社会活動のサイトです <https://comprasha.com>）そのことを背景に「もっと素材そのものと向き合いたい」という思いが強くなり、丸太を材料にした作品をつくり始めました。この作品は杉の丸太を5分（約15mm）の厚みにスライスして、隙間をつくることでリズムカルな空間を生み出そうとしたものです。なんとなくですが、オブジェでもなく、家具でもないものにしたいと思いました。木材の特性の一つは「組む・継ぐ・接ぐ」などの接合方法にあります。寄木技法などにも見られる「一度、加工して、再び接合する」というところに木材の面白さを感じて「分解と再構築」というテーマに至りました。



●Profile

- 1977 長崎県生まれ
- 1999 新制作展 初入選
- 2002 佐賀大学大学院教育学研究科修了
- 2004 新制作展 新作家賞受賞(同`06年受賞)
- 2005 ヘルシンキ芸術デザイン大学(現アールト大学美術・デザイン・建築学部)へ留学
- 2007 GJアートレインボー展(ドイツ)
- 2007 新制作展 会員推挙
- 2008 アジア芸術祭(韓国)
- 2008 佐賀銀行文化財団新人賞
- 2017 一般社団法人 金富良舎(コンプラシャ) 設立
- 2018 三人の手しごと展(福岡 weeksギャラリー)
- 2019 三人の手しごと展(福岡 ギャラリータジェール)

1977年長崎県波佐見町生まれ。佐賀大学大学院教育学研究科修了。

2005年からヘルシンキ芸術デザイン大学へ留学し、フィンランドの美術教育を学ぶ。

現在は、福岡女学院中学校・高等学校で美術教師として勤める傍ら、彫刻・木工・デザインの作家としても活動中。

「子どもたちの未来に必要な教育とは？」をテーマに全国各地で様々な実践研究を行いながら、「教員研修」「職員研修」「教育講演会」など教育関係者や行政・自治体、保護者に対して講演会やワークショップも行う。

2017年には地元長崎県波佐見町に、一般社団法人金富良舎(コンプラシャ)を設立し、波佐見町を拠点とした文化・アートの交流事業や陶磁器商品の開発を行う。

金富良舎のサイトはこちら <https://comprasha.com>

新制作協会スペースデザイン部 会員

福岡女学院中学校・高等学校 教諭

一般社団法人 金富良舎 理事